

大学教育における児童文学作品の活用(5)

— 佐野美津男『午前2時に何かがくる』から —

Utilization of Juvenile Literature Works in University Education (5)

— Based on “At Two a.m., Something Is Coming (Gozen-Nijini-Nanikaga-Kuru)”

by Japanese Juvenile Story Writer and Critic Sano Mitsuo —

茶谷 薫 CHATANI Kaoru

(芸術教養領域)

はじめに

本誌の前号までの数巻に記したとおり、子ども向けの小説やマンガ作品から学べることは多数ある^{1, 2, 3, 4, 5, 6, 7})。子どもの頃は言うまでもない。大人になっても同様で、しかも幼少期とは異なり、大人には過去を振り返る点で異なる学びとなる。本稿では児童文学作品のうち、佐野美津男の『午前2時に何かがくる』について簡単に紹介した後、これを題材にした授業で活用可能な内容を列挙する⁸)。

『午前2時に何かがくる』と佐野美津男、大古尅己

『午前2時に何かがくる』(以下、『午前…』)は1974年に国土社から『国土社の創作児童文学』の中の15巻目として出版された。この執筆陣には馬場淑子、浜野卓也、永井明などがいた。佐野は『午前…』巻末の「あとがき」において、同作は「現代の怪談」であり、不思議で恐ろしい問題が未解決のままであるように、「現代にも、怪談はたくさんある」と述べた。そのように当時の恐ろしい社会問題を織り交ぜたストーリーとなっている。

以下、佐野について、親交の深かった山中恒による解説をまとめる^{9, 10})。佐野美津男の本名は佐野髙俊(あきとし)で、1932年に東京で生まれた。1945年の東京大空襲で両親と姉二人を失い戦災孤児となった。筆名の一部である「美津」は敬愛する姉の名の一部であるという。佐野は孤児になった後、千葉県松戸市の祖母宅で一時的に暮らしたものの、祖母の横暴により家出し、「浮浪児」として様々な経験をした。その時の体験にフィクションも織り交ぜて綴った自伝的な『浮浪児の栄光』¹¹)、『浮浪児の栄光 戦後無宿』⁹)という作品がある。浮浪児生活の後、佐野はキリスト教関係団体が運営する施設で暮らした。国際キリスト教大学に推薦されたものの、結核により長期療養生活を送った。療養中に児童文学や詩に関心を持ち、のちに児童文学運動誌の『小さい仲間』同人となった。1954年に児童文学作家としても有名になる同世代の山中恒に出会い、私的にも親交を深めた。その頃に詩集『青い象』を上梓し、1958年には『大酋長ジェロニモ』を出版、1960年に「日本読書新聞」に『浮浪児の栄光』を連載し、翌年、その単行本を出版した。1965年に『子どもにとって美は存在するか(イメージの誕生)』を出した。山中によると、

この書籍は佐野が提唱した「子ども学」の基礎的な発想をなすという。また、佐野は阿部進、高山英男、畠山滋らとともに「現代子どもセンター」を設立し、古田足日たちが出していた児童文学研究誌の『小さな仲間』にも参加し、児童文学を中心とした文筆活動に入った。1970年には鈴木悦夫、千葉幹夫など児童文学作家らとともに六月社を作り、機関紙である『児童図書館』創刊にも携わった。横浜国立大学で講座を持った後、1977年には相模女子大学の講師になり、旺盛な執筆活動を続けた。同大の助教授、教授になり、在職中の1987年の5月、54歳の時に脳出血により急死した。

『午前…』の挿絵を担当したのが大古尅巳（おおふるかつみ）である。大古は佐野より4年後の1936年に奈良県で生まれた。桑沢デザイン研究所を卒業した後、松坂屋宣伝部でデザインの仕事に従事し、フリーのイラストレーターとして独立した。児童書を中心とする挿画の分野で活躍した。

あらすじ・構成

『午前…』は東京都練馬区大泉近辺が舞台である。主人公は榎沢ユミという小学校高学年と推定される女子である。盆踊りの季節のある日、ユミは校庭の隅で同級生の山田ミノルから「不幸（幸福）の手紙」や「口裂け女」と同じ構造を持つ話を聞かされた。その話を他者3人に伝え、3日後の午前2時にやってくる幽霊からの質問には定められた答えを返さなければならないという。ユミは恐怖に怯え、その話を聞かせる相手を探す一方、家族や仲の良い人には聞かせたくないと悩んだ。

ユミは翌日、話の内容が真実ならば幽霊に会っているはずの山田に、その状況を尋ねようと早朝に登校した。その時にハトの死という不吉なことに遭遇してしまう。山田は欠席し、ユミは放課後、山田宅を訪ねた。しかし、彼は家族ごとに行方不明になってしまったようだった。

ユミは、山田宅の隣人の倉持という30歳代と思われる主婦と、同級生で仲の良い関という女子とともに山田一家が消えた謎を探り始める。ところが、ある不可解なことが起きた。その原因は少し離れたところにある、庭に不気味な木が生えた「白い家」にいる人物だと、ユミたちは推定した。

誰も住んでいない「白い家」の近隣の店で聞き込みをしたところ、それは空き家ではない、と関心を抱いている大学生の青年（マサオ）と知り合った。ユミ達はマサオとともに、「白い家」の謎に挑む。その過程で精神科病棟の闇や、母親を助けようと敵対勢力と静かに戦う同世代の少女を知った。その少女はユミたちの手助けや介入を拒否し、去っていく。その場面で物語の幕は閉じる。

次に『午前…』の章のタイトル及び概要を示す。冒頭の「ゆうれい」の章は、ユミが山田から話を聞かされたことを中心に描いている。次章は、ユミの帰宅後に事故で脚を失った叔父との会話や、翌朝に山田に登校せず学校のハトが殺されていることを発見する場面

が描かれた「耳の奥のハトの声」だ。次が、ユミが山田宅を訪ね隣人の倉持と知り合い山田宅の電話が止められていることを知る「暗やみの穴」の章である。ユミらの様子を監視し警察に通報した何者かを双眼鏡で探す「ガリレイ式双眼鏡」の章までが、頁数でいえば約三分の一を構成している。

それ以降は次の通りである。ユミ達を警察に通報した何者かが潜んでいると思われる「白い家」を探る過程でマサオという大学生とも知り合う「丘の上の白い家」の章がある。続く章はユミ達が「白い家」に住んでいた一家について詳しい話を小笠原という老夫婦から教えてもらい、更に翌朝、ユミが学校のハトが殺された事件の不可解さを用務員から聞かされた「ローオルヒヤセルベンチナ」である。次章の「R精神病院」では、ユミは倉持から「白い家」の小学生の少女と、その母親がそれぞれ入っている精神病院について報告を受け、少女と連絡を取ろうと、大学生のマサオとユミがR精神病院に向かう。そこで盆踊りの準備をさせられている患者とマサオが接触し、少女の病棟と病室の位置を教えてもらう「陰気な盆おどり」の章が続く。ここまでで作品全体の頁数は約三分の二となる。

ユミとマサオが少女の病室を覗いている時に外から戻って来た少女と邂逅する「第六病棟八号室」の章、彼女と会話したことを関および倉持と共有している時に山田宅の前で恐ろしい事件を目撃するまでを描いた「白い家の女の子」の章がある。その事件後、ユミは真夜中に「白い家」に行くことを決意し、倉持とマサオが共に向かうまでを描いた「ユミの大冒険」の章、録音された母親のメッセージを聞き決意を固め、ユミ達の関わりをきっぱりと断る少女と、ユミの思いを描いた「午前2時のことば」の章で物語は締め括られる。以上の本編の後に佐野による「あとがき」が2頁、配されている。

授業で活用できる具体例

『午前…』では、発行当時の世相や、話題となったベストセラー書籍などに触発されたと推量されることが多数述べられていた。以下に例を挙げる。

不幸の手紙

行方不明になった山田探しを通じ、ユミと深くかかわる同級生の関は、ユミが山田から聞いた恐ろしい話を聞かされた際、新聞で読んだという「不幸の手紙」について話す。「死神からの命令」で「手紙を受け取った人は20人に同じ手紙を書いて出さないと不幸に襲われる」というのだ。その社会不安を無くすため、警察は手紙を燃やし、「不幸の手紙」を受け取り不安な人は、手紙を警察宛てに出すようにと記事にあったと述べる。

丸山泰明によると、「不幸の手紙」は日本では1920年代以降、海外に由来した「幸運の手紙」として広まったのが最初ではないかという。それはまるで外来生物が土着していく過程に似ているとのことだ¹²⁾。「幸運の手紙」は、手紙を受け取った人が同じ文面を写し、複数の別人に送ると幸福になるが、そうしなければ不幸になる、という構成である。「幸

運の手紙」から「不幸の手紙」への転換は、この作品が出版された1970年代だという。

「不幸の手紙」は丸山が論じる通り、生物の進化モデルを援用した分析、上層階級に輸入され和訳され国内で「進化」し、大人の社会から子どもに広がったこと、「土着」宗教との交雑、それらの社会的背景、宣伝媒体としての役割があったこと、治安・防諜の観点から危険視されていたこと、インターネット時代には郵便メディア時代とは異なることが予想されることなど、様々な観点で興味関心を喚起し、総合的な探究ができるトピックである。

怪談

『午前…』の冒頭、山田がユミに語った話は、3日以内に3人の他者に同じ話をしなければならないという点で上記「不幸の手紙」と似た口承の怪談である。また、作品出版後の五年後に日本を席卷した「口裂け女」とも似ている。「口裂け女」はマスクで口を隠した状態で「私、きれい？」と尋ね、問われた人が言葉による回答や物品による対処法を誤ると殺害される、などの多様な「変異株」をもつ都市伝説であった¹³⁾。

『午前…』の冒頭に語られる怪談は、ある不幸なことで落命した人間（この場合は、事故で四肢を失った警察署長）が幽霊になり、不幸な出来事に直接的関わりを持たない人に、その人の四肢を乞い、最後の質問に回答しなければ幽霊が消える（つまり助かる）、という形式である。前半は何らかの原因で口が裂けた女が現れ、定型の回答が求められる点で「口裂け女」に似た構造である。後半は沈黙が求められる点において、平家の亡霊に耳介を奪われた「耳なし芳一」のようである。

柳田國男は、話者が本当だと思って話す場合と、本当ではないと思いながら話す場合の、二種類の怪談があるという¹⁴⁾。吉田悠軌は近代人の一人である柳田について、「科学的に実証できずとも、個人の不思議体験は存在」し、「それを分析し、隠された「事実」を発見、抽出すること」が重要なため「創作ではない生の怪談が必要」で、「その話が語られたかの科学的」理由を探究する点が、迷信を否定しようとした井上円了と同じであり、単なる「怪談好き」とは異なると分析した¹⁵⁾。また、吉田は怪談について、時代によって「ガジェット」は変化するが、本質的な構造は変わらない、リアリティをどのように感じるか等について興味深い論考を著している。

吉田によれば1970年代から心霊をキーワードにオカルトブームが勃興したという。それは21世紀初頭の怪談とは異なるとも主張する。これらは『午前…』が1974年に出版された時代背景を考えさせるものだろう。

古谷博和のように、脳科学的な立場で柳田の収集した会談を分析した研究もある¹⁶⁾。それだけではなく、不可解な怪談を求める人々の気持ちがどのようになるか、疑似科学に左右される世論や、それが形成される社会的背景などについても、探究可能なテーマとなる。

潜入取材

『午前…』には、精神病院のスタッフの家族を装ったユミ達が盆踊りイベントに潜入するシーン、マサオとユミが新聞配達や早朝ジョギングをする振りをし、病院の敷地に入る場面が描かれている。それ以外にもユミらが私立学校の教師と児童を装う潜入計画を立てたり、買い物客として聞き込みをしたりする場面もある。

また、マサオが『精神病院』というタイトルの本を抱え、精神病院での患者虐待の話をするシーンがある。これは新聞記者の大熊一夫がアルコール依存症を装い、ある精神科病棟に潜入取材した『ルポ・精神科病棟』をモデルにしていると思われる。大熊はそれ以降も続篇執筆や老人病棟の潜入取材に携わった¹⁷⁾。

明治時代からマスメディアの記者が潜入取材をすることは多かったが、平山亜佐子は戦前の新聞社においても差別されていた女性記者の潜入取材を活写し、多くの書評で取り上げられた¹⁸⁾。21世紀の現在も有名な大企業に潜入取材しているジャーナリストがおり、その報告は社会のために役立っている¹⁹⁾。潜入取材は法的な問題さえ無ければ、非常に有効な手法であり、参与観察の一種とも謂える。学生が調査を志向した場合、先人の記録は強い示唆を与えるだろう。

昭和40年代の日本社会

前述したオカルト化、「不幸の手紙」の流行以外にも『午前…』には、出版当時の様子を窺い知れる記述が多数ある。例えば学校の様子である。児童である山田の椅子に盆踊りの季節（つまり夏）でも小さな座布団が付けられている。校庭で朝礼があり、その隅に砂場や鳩舎（ハト小屋）があり、そこで遊ぶ児童は少なく、砂が固まってしまっている。砂場はともかく、鳩舎やウサギ小屋を備えた公立小学校は現在の東京23区にどの程度あるのだろうか。用務員室に用務員がいることも現在ではほぼ皆無だろう。

用務員が陸軍の衛生兵だった、と述べるシーンがある。昭和20年から二十余年経った『午前…』の時代は、現役世代の元兵士が様々なところで働いていたことを想起させられる。また、「白い家」を建てた人はインドやパキスタンでとれる綿（原綿）の輸入貿易商で、精神病院の少女の祖父という設定である。これもアジアに進出した第二次世界大戦頃の日本の動きとの関係を連想させられる。

用務員が、殺された鳩を温州ミカンの段ボール箱に入れ、自転車の荷台に載せ、校外の空き地に埋葬しに行くシーンがある。他にも、山田宅は「しばふ畑」の向こう側にあり、古いお寺の向かい側の畑が雑草茫々の空き地、という描写もある。しかし、現在の都市部に、これらのような空き地があるのだろうか²⁰⁾。また、ヒイラギの木の垣根の横は「昔からの農家という感じの庭（大きな木がこんもりと茂る）」で、薄暗い道があるという風景も、現在の練馬区ではどのくらい見られるのだろうか。野犬が小学校に入り込んだり、それを警察と保健所が捕まえたり、ということは、現在の都心部では稀になっただろう。

ユミが砂場の砂が元来存在していた場所を詩的に想像するシーンがある。その想像では川底で幸せだった砂が、砂場に入れられ寂しく、更に川底の記憶を失っている。これは高度経済成長期の都市開発、道路や鉄道の敷設で日本の環境が大きく変わったことを暗示している。また高台の「なだらかな斜面」に家が何列にも並び建つ、という描写がある。これも都心の郊外に住宅が次々と住宅供給公社により「供給」された時代を反映している。工事現場の人たちが草色のヘルメットを被り、土が盛り上げられている、という描写もある。

ライフスタイルの変化を伺わせる記述もある。中学1年生、つまり12～13歳の兄がいるユミの母親が38歳という記述は、20代半ば迄に結婚、初産を迎える当時の一般的な女性像だったのだろう。物語では「隣近所で付き合いをしたがらないことが多い」が、山田と倉持は付き合いがあるというエピソードもある。地方から都市部への流入人口が増大するなか、首都圏における人々の交流の在り方が変わってきたことを伺わせる一節である。警察官が東北訛りである、という場面もある。これも地方からの「国内移民」の象徴的な描かれ方である。

ユミや倉持とともに白い家の謎解きに加わるマサオは、姉が50歳くらいに見える顔色の悪い人で、「おれたちのおふくろ、去年の秋に死んだんです。ガンでした」と述べる。多産だった時代に生まれた人ならば、地方から出てきた年の離れた兄弟姉妹は然程珍しくはない設定だったのだろうか。

通学路には「みどりのおばさん」が立ち、両親共働きの鍵っ子が友人宅に遊びに行く設定や、主人公のユミは年の近い中学一年生の兄と両親の核家族という点も、物語の時代を反映している。ユミと兄が子ども部屋の二段ベッドで就寝する設定もそうであろう。ユミの家庭では、テレビで「怪獣ものの再放送」を視聴し、新聞記事を元に父と兄が一家心中について会話する。新聞の購読者数が減り、一人に一台、スマートフォンがある現在ではそのような会話がし難い現代とは対照的だ。

ユミの父は「草木も眠る丑三つ時、軒先も三寸下がって虫の声も止んでしまう」と教え、『午前…』の時代になると午前二時でも人通りがあり、酔客がいるものの、正月や雨の夜は静かであると述べる。21世紀の練馬区の住宅街ではもう少し人通りが増えているだろう。

また「子どもが学校を休むなんて、おとなが仕事を休むよりも、ずっとたいへんなことなのに」という言葉がある。『午前…』が出版された頃は「不登校」という言葉は一般的ではなかった。不登校が比較的知られるようになり、不登校生徒が多く通う通信制高校も増えている現在とは大きく異なる状況だったと推量される。また、ユミが親に対して、隠し事をする際は、宿題だと思わせておけば良い、とする場面や、友人の関が、ユミらが山田や「白い家」の謎解きの作業をしている間に、学習塾に行くため抜け出す場面がある。また、ユミは「グループ学習の総しあげ」のため、関宅に外泊するという口実を使い、夜

に抜け出す。これらは子どもに所謂「勉強」を推奨していた世相を表している。

ユミの家には「茶の間」があり、叔父が来た時はそこに通され、長方形のテーブルに着席する。玄関は格子戸である。晩になると茶の間でテレビの時代劇を見ながらコップの酒を飲む父親がいる。その時代劇では矢絣（矢がすり）の着物の腰元たちが踊り、黒覆面の男がひらりと塀を乗り越える場面が映される。

当時の洒落た住宅のイメージも読み取れる。山田の、赤い傾斜の急な高い屋根で、二階家ではなく、屋根裏部屋があるかもしれない家だ。ユミは屋根裏部屋で古い木製の椅子に腰かけ分厚い外国の本を読むと素敵だと思うのである。その家には門、玄関には「インタホン」の「ボタン」があり、下はコンクリート敷きで、その両脇は石炭ガラのような黒いものが敷き詰められ水を吸い込み、ガレージには自動車、「勝手口」の牛乳箱に牛乳とヨーグルト、郵便受けに新聞がある、という描写である。隣家の倉持宅は、ダイニングキッチンでテーブルで紅茶にレモンライスかミルクポットに入れた牛乳を添えたり、クラッカーと「ソフトチーズ」とジュースが子どもたちに供されたりする。飾りブロックのあるブロック塀も登場する。マサオの近隣で古株の上品な外見の老夫婦である小笠原の家は、赤い屋根の二階建てで、玄関脇のバルがあり、応接間にはソファがある。

山田宅ではガス漏れの臭気がせず、ガス中毒の心配もないという記述があり、ガス中毒事故や自殺の報道が目立った時代を想起させられる。また山田一家が「不渡り手形を出し」、「やくざの手に渡り」、「夜逃げ」、「蒸発」したということは、現在も起きていると推量されるが、社会問題として大きく報じられる頻度は昭和時代よりも減っているのではなかろうか。

当時の日用品や日常生活、身振りや擬音等についての描写も多数ある。例えば、電話の「ダイヤルを回す」という表現や、山田宅の隣家である倉持が「ヘップ」を履く場面だ。後者については洒落たイメージを前面に押し出したヘップサンダルとして販売している会社が本稿執筆現在もある²¹⁾。関は自転車を立てたり、買い物かごを下げたり、幼いころからピアノを習っていたり、外国人のような「首をすくめ両手をひらいて、がっかりというゼスチャーを」したりする。踏切や自動車の警告音は「警笛」とある。直感では「ピーン」という擬音で表され、自転車の「ベル」は「ちりりん」という音を出す。自転車にはスタンドがあるものと、「古い建物に立てかけられた」ものがある。ユミの母が手をエプロンで拭き、熱を測るために額を触ろうとする。ユミは「トレーニングウェアの上下」、「運動ぐつ」でマラソン練習のふりをする。

他にも、次のような場面がある。豆腐屋のオートバイと、その荷台に白い木の箱がある。盆踊りでは、提灯と造花が飾り付けられた櫓が組まれ、「細い電柱のような丸太」の上にある「四角い箱型のスピーカー」からカネ、タイコ、笛、三味線などの邦楽器の民謡が発せられる。サッシの窓越しに音が無いサイレント映画のような暴力沙汰が見える。登場する自動車は「シボレーの68年」くらいだという。救急車は通報から3分後に到着す

ることも記されている。アズキ色のライトバン、カーキ色の作業服、ジャンパー、ズックぐつ、ボール紙製の帽子の箱、洋服ダンス、カセットテープ、化学繊維の一方で木綿の見直しが起きていること、洋裁と手芸の材料を売る店で倉持が買ったのが60番の太さの五百メートルの白いカタン糸なども昭和40年代を想起させるものだろう。マサオの姉がヘップを「ひっかけて」出てきたのが土間である。倉持が大学生の頃に女子寮を覗こうとした「エッチ男」が「鳥の巣の卵を取るために登った」と言い訳したという。「エッチ男」という呼び方も、鳥の巣の卵採取のために木登りするという弁明も、21世紀の現代では通用しない。

人権意識

上の「潜入取材」の節でも記したように、1970年代は一部の精神病患者が受けた凄惨な仕打ちが社会問題化した。『午前…』の作者の佐野もこれらの問題を意識し、本書を著したことは「あとがき」などからも強く推定される。一方で、差別の拡大を恐れ、現在は殆ど使われない侮蔑的な意識や恐怖心を含んだ言葉（気ちがい、気がくった、など）が、精神病患者の描写で使われていた。むしろ、差別意識を抱いた登場人物の台詞としてであるが、現在は編集者から止められたり、註が入ったりしそうな表現である。他にも「労務者」など、差別的に使われていた言葉も見られる。

ユミやマサオが潜入した精神病院は、元はヤクザで全身に「入れ墨」をした看護人もおり、患者が虐待されている設定である。また、精神病患者の脳の一部を物理的に破壊する「ロボトミー手術」についても記されている。『午前…』では「内臓破壊術」とも記されている。最初に考案したポルトガルのエガス・モニスはこれを「ロイコトミー (leucotomy)」と呼んだ。彼は1949年のノーベル生理学・医学賞を共同で受賞したが、その術式にも受賞にも当初から懸念が出されていた。多数の国で広がったものの、問題点が多数明らかになった。日本でも、術後、日常生活が上手くできなくなり、殺人事件が起きる遠因ともなった。これらの問題は現在でも解消しきれてはいない上に、精神病院での虐待事件も過去のものではない^{22, 23)}。

「マラソンなんて、男の人のスポーツ」、女子もサッカー、ボクシングをするという一節もある。女子マラソンが五輪の正式競技になったのは1984年のロスアンゼルス大会からで、国際陸上競技連盟公認の女子のみのマラソン大会は1979年の東京国際女子マラソンである²⁴⁾。1974年出版の『午前…』では台詞の通りの認識であったと推量される。若い頃は大学生だったことが語られる倉持が「女ばかりの特別機動捜査隊。わたし、これでも車の運転、かなりうまいのよ」とユミと関を同乗させ、白い家の近くに停車する場面があるが、これも、倉持が当時の一般的な主婦ではないことを暗示しているのだろう。

『午前…』が出版された頃の常として、奥付の横にある著者紹介欄に著者の住所が掲載されている。現在では、リスクを考慮すると驚愕すべきことだが、当時は余り問題視され

ていなかったのだろう。プライバシー権がどのように推移してきたか考える端緒となるう。

ことば

上記の差別に繋がる語のみならず、『午前…』には1970年代当時の世相を表す言葉が散見される。子どもが主人公のためか、学校に関する用語は多い。前述した用務員、用務員室もそうである。他にも次の言葉がある。下駄を履いた子どもがほとんどいなくとも「下駄(げた)箱」という。上履(ばき)という言葉は今も使われているが、「下ばき」は余り耳にしない。また、主人公のユミが嫌いな同級生は「威張り腐っている意地悪小僧の」男子たちと、「勉強ばかりしている優等生タイプの」女子である。前者の「意地悪小僧」が行方不明になった山田を「山田のばかカガシ」と表現するシーンもある。本稿執筆時の2023年の大学生は殆ど使わないのではないか。他にも野良犬ではなく「野犬」、瞳を「目玉」、唾液を「つばき」、四つん這いになること「馬になる」など、現代の若者が比較的使わないと思われる語句も見られる。その他、上目使い、三白眼、お使い、器量(きりょう)よし、V(ブイ)サイン、ズボン、トレパンとトレシャツなどもそうだろう。

『午前…』では主人公のユミが、大学生のマサオの使った「虎穴に入(い)らずんば虎子(兎)を得ず」、「のりかかった船」を「年寄りが使う言葉だ」と思うシーンがある。他にも地図に掲載された個人宅の氏名を読み「熊村春左衛門というものすごい名前」と述べる場面がある。当時も「○左衛門」は違和感があったのだろう。倉持の夫を「宿六」とユミが表現するシーンがあるが、現在の子どもや大学生の多くは、それが夫を示す意味も持つことは知らないだろう。

呪術的な感性の言葉についても幾つか記述がある。例えば、白い家の少女がいるという八号室を探すために、「一、二、三、五、六、七、八」と数えるシーンで、四が無いのは、四は死に通じ、十三は死刑台の階段の数、十三日の金曜日は魔の日であるという不吉な数字についての記述がある。これは現在も残っている風習だろう。不眠気味の時、ユミは「なんという神さま」、「それとも仏さま」に祈れば良いか考え、「ねむり神さま? スイミンさま? ぐうぐうかんのん?」と言葉遊びをする。また罰が当たらないよう死神に「さま」と敬称を付ける場面もある。これらも呪術的な感性を表現している。

ユミとは非血縁者の用務員が「おじさん」と自称するシーンがあるが、日本では一般的で、言語学者の鈴木孝夫に拠れば「親族名称の虚構的用法」である²⁵⁾。

話し方についても幾つか記述がある。ユミは、関が警察官に話すときの口調が「学級会のとときの発言みたいだ」と感じる。そのユミの口調は怒った時に「ほんもののうれしいなんて、すきであるもんか」と「男っぽく」なる。このような言葉遣いが現在でも「男っぽ」いとされるかは、その人の育った環境によるだろう。

方言については、東北訛りの警察官が、「気にす(し)ないで」、「なぬ(に)も奥さん

たちを」、「おかす（し）いから」、「電話さ（を）す（し）てきてくれた」、「たす（し）かに」、「一〇番す（し）て」、「おかす（し）いと」、「わかります（し）た」、「事情さ（を）聞き（き）に」、「なぬ（に）かありましたら」、「よろす（し）く」と話すシーンがある。東北方言ではサ行の多くが「ス」になり、幾つかの音が濁音化し、「を」を「さ」で表現することなどを示している。日本語はラジオ、テレビなどの影響で標準語が普遍化したのが、そのような音声を伝えるメディアが普及して半世紀以上経った21世紀においても、イントネーションなど方言が残っていることにも気づかされるシーンである。

また、用務員がハトの死骸を入れるミカン箱に「おんしゅうみかん」と書いてある場面があるが、「温州」は一般的には「うんしゅう」と読む。

他にも、「紋切り型」、「鼻をなら」す、ロードワーク、アズキ色、横っぱら、自動車の警笛、やおら、背たかのっほ、「ひよろりと」、買物ぶくろ、ねまき、「やおら」、「なんだかんだ」、肩で息をする、「道にぺたんと」座り込むなどが見られるが、現在ではこれらを聞きなれないと思う若者も少なくないだろう。

地理

『午前…』には大泉警察署という名称が出てくる。大泉は東京都練馬区の地名である。主人公のユミがS公園にある、ミツガシワという天然記念物が群生しているというS池を通るシーンがある。S池にはかつて身分の高い姫が入水した伝説があるとも記されている。これらの記述から、S公園は石神井公園、S池は園内の三宝寺池と推測される。三宝寺池には豊島氏の姫が入水した伝説もあり、ミツガシワでも知られるからだ。『午前…』にあるよう、池の水量が減ったため、深い地下から揚水し池が枯れないようにしており、植生も大きく変化した²⁶⁾。同池以外の様々な湖沼や河川等で見られる現象である。

また、ユミが関わろうとする少女の祖父がインドやパキスタンでとれる綿（原綿）の輸入貿易商だったという記述もある。これも実際にある国名で、インド製の綿製品は現在の日本でも良く売られている。

他にも黄色い電車と茶色の電車がすれ違う場面があるが、これは恐らく西武鉄道池袋線に昭和40年代に登場した黄色の車両と、同社前身の武蔵野鉄道時代の茶色い車両のことだろう^{27, 28)}。

このようなことを端緒に、知的好奇心を喚起し、学生たちが調べる意欲を高めることができるだろう。

自然科学

前節の石神井公園にあるミツガシワはミツガシワ科の多年草で、学名は *Menyanthes trifoliata* である。「三つ櫛」や、「水櫛」などの漢字で表記される。北半球の寒冷な湿原で見られる。『午前…』には、クイナやカモがこの池に集まると記されているが、むろん

それらは鳥類である。

ユミの兄が飼育しているという設定で登場する、世界中で親しまれる熱帯魚のソーデテールは、カダヤシ目カダヤシ科で、メキシコ原産である。オスの尾鰭の一部が剣のように長く、それが語源である。和名はツルギメダカという。雌雄どちらにも性転換することでも知られる。ユミが山田探しの際に出会う倉持や山田は、ソーデテールの水槽にエアポンプやサーモスタットを設置していることになっている。この魚に限らず、生物飼育において酸素や温度の管理が重要であることは論を俟たない。

空き地の道路沿いにドバトがいるアカマツの描写がある。アカマツは陽樹で、明るいとところで生育することと合致している。ヒイラギの垣根という精神病院の設定も棘の鋭い葉が防犯面でも有用で、なおかつ呪術的な魔除けにも役立つと考えられていた。ユミ達が探る「白い家」にあるローオルヒヤセルペンティナ (*Rauwolfia serpentina*) の和名はインドジャボク (印度蛇木) で、『午前…』には高血圧に有効な成分を含むとあり、科学的にもその通りである。ただし、木にスズメやオナガもとまらず、背が高い、という描写は実態とは合わない。

高血圧についても『午前…』には、高血圧者は頭の血管が切れやすく、切れた場合は死亡や「ちゅうふう (中風) という左半身がヨイヨイになる病気」のリスクが高く、「昔は中年すぎ、今は子どもにも高血圧が多」とある。実際には左半身のみならず、異常が出た血管の脳における部位によっては他の部分に支障が出る。

ユミの叔父は交通事故で右足を失い、その足に痺みや痛み、倦怠を覚えると述べるシーンがある。実際に、失われた四肢にそのような症状を覚える人は多く、幻影痛、幻肢痛などと呼ばれる。

工事現場の場面で赤土の描写があるが、これは関東ローム層のものであろう。関東ローム層は様々な火山が噴火した際に降り積もった灰で、中の鉄が酸化し赤くなったものである。

その他、洗濯機をアースしないと感電リスクがあり、場合によっては感電死すること、緊張すると生理現象で頻尿気味になることや、鏡による光の反射、ガリレイ式望遠鏡の倍率が低いこと、同じくガリレイ式であるオペラグラスなど、自然科学に関心を持つ契機も得られる。

その他

精神病院から抜け出す少女は、高い窓から病室に戻る際、「茶色の縄」の「ごろごろの」結び目に足を引っかけて登る。江戸川乱歩の『少年探偵シリーズ』でも、小林少年が絹糸を束ねた縄に結び目があり、それを足の指で挟んで登るシーンがある²⁹⁾。

ユミの叔父は交通事故で右足を失った。彼が無理に明るく振る舞っており、ユミ自身はそれを不快に感じている。ユミが山田から聞かされた四肢を失い、手足を欲しがらる警察署

長の幽霊の話をしたところ、叔父は「笑わず」、「ぼそりと低い声で『そういうことも、あるだろうなあ』」と言った場面がある。これは浮浪児として苦勞し、社会の底辺で暮らす様々な人を見てきた佐野の人間観の深さを示しているのではなからうか。他にも衛生兵だった用務員が小学校のハトを殺したのは野犬ではなく人間で、刃物を使ったのだ、と語る場面も、佐野の戦中、戦後体験を連想させる。

前述したとおり、佐野は『午前…』の「あとがき」で、これを現代の怪談であると記した。また、歴史が好きであり、歴史関係の本も執筆したことにも触れている。その例として、殺した人の亡霊に崇られ遷都した天皇がいたことや、妖怪退治の記録があることにも触れている。前者は同母弟を死に追いやり、平安京に遷都した桓武天皇のことだろう。後者は鬼退治で知られる源頼光や、鶴退治の源頼政などだろう。これらの伝説はゲームやマンガ、アニメなどの題材にもなっており、幅広い学びへの端緒である。

佐野は過去のみならず現代にも不思議で恐ろしいことが多々あり、ロボットミイ手術をする人々が学者としての栄誉を得る一方で、それに抗う人々についても記した。佐野は、それらの問題について自身が納得できるように解決するか、「この世の中には解決しない問題もたくさんあるのだ……と考えてもらってもけっこう」とも述べた。一般的な人権派とは異なる見解を持っていた佐野の考えを示す言葉であるとともに、課題を発見、調査、解決法を試行し続けるという、社会で広く行われている様々な取り組みを学ぶ上でも重要な考え方だろう。

大人の学びに有益な児童文学

以上まとめたように、『午前…』は、近現代の歴史や社会風俗、社会心理学、社会調査法、地理学、自然科学などに興味を抱かせる契機となる。また、所謂「総合的な探究」やアクティブラーニングにも適したテキストである。

私事であるが、筆者は小学3年次に『午前…』を学校の図書室で借りて読んだ。タイトルを目にし、当時の筆者が興味関心を抱いていた一般的な怪談だと勘違いしたのである。『午前…』の冒頭は前述の通り「不幸の手紙」形式の怪談であったが、後半はそうではなかった。小学生の筆者には難しい社会問題が描かれ、書籍を借りた当初の期待とは大きく異なっていた。しかし、非常に印象的な物語で記憶に刻まれた。筆者が大学生になり再読したところ、地名も架空の物は少なく、実際に起きた深刻な事件を下敷きにしたものだと気付かされた。また、小学生の筆者には、「あとがき」は意味が難しく、理解が及んでいなかったことが確認できた。

本稿執筆前に更に再読したところ、授業でも利用できる内容に溢れていると考え、実際に筆者が担当する授業内で幾つかの事例を紹介した。半世紀前に出版された『午前…』は古い書籍を多数蔵する大型の公立図書館には収められているが、身近な開架図書にはなっておらず、新刊書を販売する書店においても古書店においても入手しにくい。その障壁を

越え、授業で興味を抱いた学生の一部が、図書館で借りて読んだことが分かった。このような書籍に触発され、日常的に図書館に親しみ、深く物事を考える学生や社会人が僅かでも増えることを願う。

謝辞

本稿は名古屋芸術大学の個別研究費および令和4（2022）年度特別研究費（課題名「高大接続教育、大学教育、社会人教育における児童・ヤングアダルト文学作品およびマンガ作品の教材としての利用」）の助成を受けた。編集と出版に尽力して下さった名古屋芸術大学図書館の教職員各位、校正にあたられた印刷・製本会社の方にも感謝する。

文献および註

- 1) 茶谷薫、2020、大学教育における児童文学作品の活用(1)―カニグズバーグとリンドグレーンの生涯と作品から―、名古屋芸術大学研究紀要41巻 107-121
- 2) 茶谷薫、2021、大学教育における児童文学作品の活用(2)―山中恒『ぼくがぼくであること』から―、名古屋芸術大学研究紀要42巻 157-166
- 3) 茶谷薫、2021、「学習マンガ」ではなく「娯楽マンガ」を教材利用する意義―『スター・レッド』を例に―、名古屋芸術大学教職センター紀要9号 1-13
- 4) 茶谷薫、2021、娯楽マンガ作品を教材に『暗殺教室』に描かれた理想の教師・学校像、名古屋芸術大学キャリアセンター紀要10号 63-75
- 5) 茶谷薫、2022、大学教育における児童文学作品の活用(3)―後藤竜二『算数病院事件』から―、名古屋芸術大学研究紀要第43巻 143-157
- 6) 茶谷薫、2023、娯楽マンガ作品を教材に(3) 山田芳裕作『望郷太郎』、名古屋芸術大学キャリアセンター紀要11号 83-94
- 7) 茶谷薫、2023、大学教育における児童文学作品の活用(4)―古田足日『宿題ひきうけ株式会社』から―、名古屋芸術大学研究紀要第44巻 163-178
- 8) 佐野三津男、1974、午前2時に何かがくる、国土社
- 9) 佐野美津男、1990、浮浪児の栄光 戦後無宿、辺境社。同書の主な構成は、少年向けの『浮浪児の栄光』（下記11）を大人向けに改稿したものと、続篇及び関連する詩である。佐野の急逝により、改稿できなかった部分は山中恒の判断で『浮浪児の栄光』の後半部分が接続してある。また、続篇は『現代の眼』に連載された五回分である。巻頭に山中恒による佐野の人物および同書の構成についての説明が付され、巻末には編集部による書籍の構成の一覧が示されている。
- 10) 佐野美津男、1988、宮沢賢治の童話を読む、辺境社。巻末に鈴木雅夫による解説と、山中恒による佐野についての経歴説明がある。
- 11) 佐野美津男、1983、浮浪児の栄光、小峰書店、文学のひろば 20。本文でも記した通り、同書は1960年に『日本読書新聞』に連載されたものが1961年に三一新書（三一書房）になり、その後絶版され、小峰書店から出版された。三一書房と小峰書店それぞれの出版時のあとがきが付されている。
- 12) 丸山泰明、2012、「幸運の手紙」についての一考察、国立歴史民俗博物館研究報告、第174集、研究ノート、pp. 309-317
- 13) 松田美佐、2014、うわさとは何か―ネットで変容する「最も古いメディア」―、中公新書2263、中央公論新社。ここには口裂け女の噂話が海外にも現在伝わっていることが記されている。
- 14) 柳田國男、2007、柳田國男集 幽冥談―文豪怪談傑作選―、ちくま文庫、筑摩書房

- 15) 吉田悠軌、2021、日本人は何を怖がってきたのか—現代怪談の変遷—、中央公論編集部、https://chuokoron.jp/culture/117875_1.html、https://chuokoron.jp/culture/117875_4.html
- 16) 古谷博和。パーキンソン病と幽霊譚との関係について、Frontiers in Parkinson Disease 2014, 7(2), 56-58
- 17) 大熊一夫、1973、ルボ・精神病棟、朝日新聞出版。1970年に朝日新聞で連載、1981年に朝日文庫版、2013年に電子書籍加筆復刻版が kindle から出された。
- 18) 平山亜佐子、2023、明治大正昭和 化け込み婦人記者奮闘記、左右社
- 19) 例えば潜入取材で有名になった横田増生は、『ユニクロ帝国の光と影』(2011、文藝春秋)、『潜入ルボ amazon 帝国』(2019、小学館)、『「トランプ信者」潜入一年：私の目の前で民主主義が死んだ』(2019、小学館) など、潜入取材結果の書籍を出版している。無論、半世紀前の潜入取材のバイブルとも謂われる『自動車絶望工場』の鎌田慧は日本では特に知られたルボライターである。
- 20) 堀切直人、2009、原っぱが消えた—遊ぶ子供たちの戦後史—、晶文社。これには空き地(閑地)についてのエッセイが記されている。
- 21) 川東履物商店のハップサンダル宣伝 WEB <https://www.hep-sandal.jp/> には「長年日本の家庭で愛されてきたハップサンダルを、現代ならではの履物として、様々な角度からアップデート」するとある。また朝日新聞社の WEB には2023年6月8日付の「昭和レトロのハップサンダル 履物産地、奈良の企業が開いた発信拠点」という記事があり、「ハップとは映画「ローマの休日」で有名なオードリー・ヘプバーンのこと。映画で着用した足の甲だけを覆うつまみタイプ」と解説されている(<https://www.asahi.com/articles/ASR625VJLR5XUPQJ002.html>)。
- 22) 田中雄一郎、2022、ロボットミエの歴史(1)：緒言聖マリアンナ医科大学雑誌、Vol. 50, pp. 93-96。この巻以降の一連の田中による「ロボットミエの歴史」シリーズ論文にはロボットミエ手術に纏わる社会文化的な状況などが分かりやすくまとめられている。
- 23) ポール・A・オフィット (Paul A. Offit M.D)、大沢基保 (監修)、ナショナル ジオグラフィック編、関谷冬華訳、2017、禍いの科学 正義が愚行に変わるとき、日経ナショナルジオグラフィック社。原題は Pandora's Lab: Seven Stories of Science Gone Wrong。
- 24) 朝日新聞、2023年10月1日閲覧、世界初! 女子限定のマラソン大会だニヤ 朝日新聞社小史 ストーリー(3)女子マラソン、<https://www.asahi.com/corporate/guide/outline/shorthistory/14509767>
- 25) 鈴木孝夫、1973、ことばと文化、岩波新書、岩波書店
- 26) 東京都東部公園緑地事務所、2018、石神井公園三宝寺池沼沢植物群落保存活用計画、<https://www.kensetsu.metro.tokyo.lg.jp/content/000043645.pdf>。これには三宝寺池の近現代史も分かりやすくまとめられている。
- 27) 小佐野景寿、2019、西武101系、走り続ける「黄色い電車」の元祖 誕生から50年、色とりどりの40両が今も現役、東洋経済オンライン、<https://toyokeizai.net/articles/-/296862>。ここには「西武といえばやはり「黄色い電車」というイメージを持っている人が多いのではないだろうか」とある。
- 28) 東京新聞、2023、武蔵野鉄道のカラー復刻「創立110周年トレイン」西武池袋線など運行、<https://www.tokyo-np.co.jp/article/228364>。ここには武蔵野鉄道の代表的な車両は茶色だったと記されている。
- 29) 江戸川乱歩が1936年の『少年倶楽部』(大日本雄辯会講談社)に連載した『怪人二十面相』は戦後、光文社、ポプラ社、講談社、新潮社、岩波書店、ゴマブックスなどが出版してきた。怪人二十面相、明智小五郎、小林少年らが活躍する本シリーズ本は『少年探偵団』、『妖怪博士』、『怪奇四十面相』など多数ある。本稿の本文に記した通り、このシリーズ中に監禁された小林少年が探偵団の道具を使い脱出するシーンが幾つか描かれている。